

土の栄養 北陵幼稚園（島根県簸川郡）

【5歳児】

5歳児は幼稚園の中で最も年長者であるという自覚と自負が心の発達に影響しているように思う。2歳児、3歳児にやさしく接しようとする朝の登園を見守る姿が見られる。一方、遊びでも今までの遊び方とは違う様子が伺われる。難しいと思えることに挑戦しようとする真剣に向き合い、自らの考えをはっきりと伝えるなど5歳児の特徴をよく表している。この特徴から、子どもと共に「命」をどのように考えて保育につなげていくかについて、保育者は子どもの共同作業者として、子どもの心を受け止めつつ実践を深めたいと考えた。

月 日	子どもの活動・ 保育者の指導や状況	遊びの考察
4/5	切れ端から緑の葉が伸びている人参をトレイに水を入れて浸し、部屋に持って行く。 A児「先生 きれいだね・・・」 M子「どうしたら 芽が出たの」 部屋の真ん中に積み木を置き、その上に人参を置く。子どもの様子を伺う。	<u>子どもたちと命が感じられる保育を目指したいと保育者自身楽しみである。家庭で使った人参の切れ端を水につけておいたら、きれいな人参の葉が伸びていることを見て、保育のきっかけにしたいと考えた。この事柄に興味が出るのかどうかを見守りたいと考えた。</u>
4/10	K児 家から、芽が出たジャガイモと人参を持ってくる。イチゴパックの中に水を入れて、大切そうに見ている。積み木を持ってきて自分のジャガイモと人参を置く。名前も書き、持ってきたことへのアピールをする。	
4/11	大切な野菜たちになってほしい。 M子、K子、S児、S子は人参を持ってくる。 A児はリンゴとバナナを持ってくる。 T「リンゴやバナナはどこから芽が出るかな？」 A児「先生違うよ リンゴとバナナは木が生えてくるよ」友だちに「木だよ 木」と訴える。	野菜の切れ端が集まりにぎやかになる。 大根・セロリ・キュウリ・バナナ・リンゴ・アジサイの葉・ジャガイモ・サツマイモ・キャベツ・玉葱
4/13	G児セロリと生姜と大根とリンゴを持ってくる。 N児キャベツときゅうりとキウイを持ってくる。 A児とG児は降園前、野菜たちを外に出して帰ると言う。G児「大きくなるもんね」 K児「僕は中に入れて帰る。だって、中の方が温かいもん」という。	 
4/17	M子の人参の芽が出てくる。「出たよ！見て！葉が出たよ！」大喜びをする。みんなが見る。 「Mちゃん すごい よくやった！」と褒められる。	<u>だんだんと増える野菜たち</u> バナナやリンゴの芽が出ることは、到底無理だとすぐに判断したいのが保育者である。今回は子どもたちが『考え』『試行錯誤』し『情報を得る』ことに気付き、より遊びを深めるきっかけを大切にしたいと思い、保育者は多くを語らないように心がけた。野菜への強い思いが伝わる会話が聞かれ保育者自身が毎日楽しくてしかたがない。
4/18	A児のバナナとリンゴが黒くなっている。 A児「バナナが黒くなってきた。リンゴも・・・」 悲しそうである。必死で水替えをする。 「ヌルヌルだ！」 A児はバナナとリンゴは水替えをしても無理だと感じ土に埋めることにする。（プランターに土を入れる） 「バナナとリンゴは黒くなったから土に埋めるよ。土の栄養になるかな？それとも木になるのかな。楽しみだ」	保育者が想像した以上に子どもたちは、野菜に対する思いがある。A児のバナナとリンゴが傷んできたことで、子どもたちが次に考えるきっかけができた。『腐る』と命がないということに結び付けた。それを捨てるのではなく、次の命につなぐという考えを、5歳児の子どもがもてることに感動を覚えた。
4/20	K児は毎日の気温を気にする。「今日は暖かいから野菜たちを外に出すわ」 外に机を出し、椅子を持ってきて座って野菜を見守る。 T「じっと見てなくても大丈夫だよ！」と言う。「いいわ・・・」とそっけなく応える。 子どもたちが野菜たちを生かそうとする気持ちが嬉しくて『やさしいいきている』の本を読む。読み終わって「生きるってどんなことかな？」とふとつぶやく。 K児「心臓が動いているってことだよ」	 <u>野菜の変化を見たいとじっと見守る</u>

	G児「走れるってことだよ」S児「芽が動くってこと(大きくなること)」N児「頭で考えるってことだよ。だって考えることは楽しいよ」	
5/ 7	<p>「人参、ドロドロだ・・・水が多かったかな」 連休明けでどの野菜も元気がない。 M児「水を替えなきゃ。大変！」M子、S子、H子も急いで水替えをする。「元気になるかな？」 ナスビ、リンゴ、玉葱、牛蒡は土に返すことにする。 N児「あのね。土の中の虫たちが喜ぶよ。土の栄養になるから・・・」 S児が土に返した人参から新しい命の誕生に歓声をあげる。N児の人参も新しい命の誕生である。「僕のも芽が出たよ！」大喜びである。 T「水の中では傷んでしまったのに、土の中だと何故、新しい芽が出たのかな？すごい力だね」 A児「だから 土の栄養だよ」「言ったでしょ」 K児「栄養があったから また生きようとしたんだよ」 S子「不思議なことだね・・・野菜たち」 H子「給食を食べると大きくなるよね 一緒かな」 「先生 走ったら 心臓がドキドキする ほら触ってみて、動いてるでしょう」とG児、A児、K児たちがやってくる。 「先生ね みんなが生きてるってことが嬉しいよ 心臓の音聴いてみる？」と聴診器を出して聴く。「すごい音だ」「生きてる音だ」「明日は走る前の音聴いてみたい！」女児も集まってくる。 K子「幼稚園のみんなに聴かせたいね！」 Y児「生きてるってことだね」</p> 	<p>連休前自分の野菜の持ち帰りをする子どもたちもいたが、家族で里帰り、旅行に行くから無理だと判断した子どもたちは園に置いて休みにいった。 そのため、連休明け自分の野菜を心配する姿が真剣であった。</p> <p>連休明けは子どもたちが久しぶりに出会う野菜たちとの感激の対面である。休み明けに変化している野菜たちは、子どもたちにいろいろな気付きを伝えてくれたと思う。保育者ではここまでの指導性が発揮できるかと考える。<u>野菜たちの無言の教育に感謝である。</u></p> <p>「先生走ると汗が出るよ。しょっぱいよ」と話す子どもたちの会話の重さに啞然とする。保育者は子どもたちに何か感動できることはないかと考え、聴診器を出す。<u>心臓の音を聴くと本気でその音の重さに目を輝かせる。この手立てはとて素晴らしいと思う。</u> 野菜の命を育てる経験が、物は大切に、人間はもっと大切にしたいという思いが伝わってくる。<u>仲間意識が強くなっていくのがわかり嬉しくなる。</u></p>
5/16 5/22	<p>S子「先生 Sちゃんの人参の茎大きくなって。太くて強い！」土に返した人参やネギに見入っている。 G児・N児が自分たちが土に埋めた野菜がどうなっているのか掘り出そうと相談している。 G児「僕 ここに埋めたが・・・掘るぞ・・・」 「うわー こんなになっている」栄養を吸い取られ、筋だけが太根の形で残っている。 N児「僕は人参だ！土に返したときより人参の実は小さくなっているってことは、土の栄養になっていったということ」 A児「土の中で、腐っても生きていることだよ」「強い心をもっているんだ！」みんなが納得をする。 強い心と聞いて保育者は子どもが頼もしく見える。</p>	 <p>人参に花が咲く。 葱坊主もできる。</p>  <p>筋だけ残った太根 子どもたちの、深い思いを大人はもっと受け止めなければならないと思う。</p>

みどころ

ニンジン¹の切れ端から出ている芽を見て「きれいだね」と感じて水栽培を始めています。「バナナはどこから芽が出るの？」とやってみるとバナナは黒くなり水がヌルヌルになってしまい土に還しました。同様に土に還したニンジンからは新しい芽が出て感動しています。身の回りによくある出来事と思えることでも、幼児期の素晴らしい感性で、子どもたちは様々なことを感じ、心を動かして環境にかかわり、いろいろな発見や感動体験をしています。土への興味、土と命とのつながりを子どもなりに感じる体験をしています。